

自然のチカラ、 住まいの素材

本当の建築塾

自然素材とは名ばかりの新建材(工業製品)が多い中、読者の皆さんにはウソ・ホントの使い分けをこのコーナーでお勉強して頂いていますが、今回のテーマは『板金』。そもそも板金というと車の修理に出す板金塗装のイメージが強いかも知れませんが、家づくりにおいて必ず必要な工事である建築板金とは何か、について解説をさせていただきます。

解説◎山本康彦
取材協力◎株式会社ワイズ

建築板金とは？

板金工事というと馴染みが薄いかも知れませんが、住宅、こと木造の家づくりにおいて代表的な工事種例を挙げると、銅板、鉄板葺きなどの屋根や外壁、雨樋など、特に窓以外で雨の侵入を防ぐための雨仕舞を一手に引き受けるような職種になります。屋根や壁など複雑で入り組んだ形状に対し、切る、折る、曲げるなどしながら、雨が建物内部に侵入しない様に防ぎ、暴風でも吹き飛ばされず、かつ美しい仕上げでなければなりません。これらの作業は機械化が進んでいる現代とはいえ、職人の手で行う作業も多く、家づくりを行う職種の中でも特殊な技能が求められます。

神社やお寺などの屋根の場合は、特に複雑な形状が多く、それらに対し雨仕舞いを考えた上で綺麗に納める技は、職人芸と呼ばざるを得ない世界なのです。

日本では、当時、貴重だった金属を材料として、かんざし飾りや小判などを作っていた職人が板金工のはじまりとされています。そこから派生、枝分かれをしていき、昔前は、ブリキ屋と呼ばれ、鍋やや缶などを作ったり修理したりするだけではなく、トタンや真鍮、銅やステンレスの薄い板を加工し、米びつ、氷冷蔵庫、木電柱の傘、煙突からパーマのクリップなどにいたるまで、注文品をすべて手造りで製作していた様です。

身近にある板金工事

それでは現在の家づくりに於いての板金職人が行う主な工事と、それらに使う材料(材質)についての説明をしたいと思えます。

〈屋根〉

板金工で使われる屋根葺き材は金属になります。金属といってもステンレス、カルバリウム鋼板、銅板、トタン(亜鉛鉄板)などが現在では多く使われます。それぞれの詳しい材の特性の説明は割愛させて頂きませんが、大きく分けるとステンレスは耐候性が高いですが、価格は高く、材が固いため加工は容易ではありません。トタンは価格は安いですが、耐候性が劣ります。最近では価格が安定している事に加えて、加工も易く、耐候性もほどほどにあるガルバリウム鋼板葺きが多くなりましたが、表面を塗装しているので、

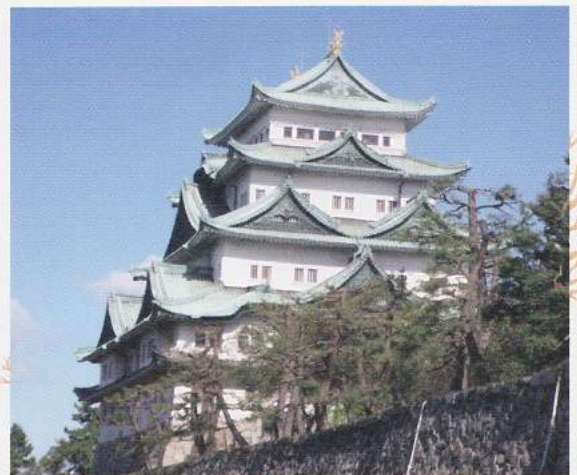


銅板葺き

材質の良否はともかく、経年劣化は避けられない材ともいえます。それらの中でも神社やお寺に多く使われる材が銅板になります。銅は材の特性から経年変化により酸化する事によって、錆(緑青・ろくしょう)が発生し、その緑青が表面に皮膜をつくり、内部の腐食を防ぐ効果や抗菌作用があるのです。同じ錆でも他の材質の場合は、緑青とはならず、普通の錆となって劣化し、下

地の木もろとも腐らせてしまいます。

写真の名古屋城ですが、一見みると瓦の形をした屋根に見えますが、下地がすべて木材で造られており、瓦のように曲線を表現して、その上から銅板を葺いてあります。



名古屋城



日光田母沢御用邸

現代の様に、塗装で緑青色を施しても必ず経年変化で劣化してしましますが、名古屋の様に自然の力で作られた独自の緑色は機能性だけでなく、とても美しいですね。

また、大正天皇の夏の静養地として造営された御用邸。三階を除くすべての屋根がひと繋がりになっています。言うのは簡単ですが、実際には、屋根勾配(角度)が微妙に違いがあり、ここまで綺麗に納めるには、板金職人の技が光ります。

〈樋(とい)〉

雨から建物の軒先などの部位を守る雨樋の歴史は、江戸時代までは社寺仏閣を中心に普及していたようです。

しかし、当時の一般の民家などは、草や茅を用いて屋根を葺いており、屋根自体が水分を吸収する事や、軒先を作業場として利用していた為、庇(ひさし)を長く張り出して軒を深く取っていたため、雨樋の必要もなかったようです。それほど歴史的には



鎖樋

古くない雨樋ですが、その昔は銅製の雨樋を板金職人が作ってきたこともあり、現在でも雨樋工事＝板金工事となっています。

高度経済成長期以降は、塩ビ製(プラスチック)の雨樋が増え、大量生産が可能で、価格も安く、色や形なども多彩で種類も豊富に存在します。しかし、材質の特性で日当たりの良い箇所ほど、紫外線劣化が起きてしまい、寿命は経験上15年前後でひび割れてしまうなど、想像より短期で全ての雨樋を交換しなくてはいけない状況になります。

雨樋も銅やガルバリウム、ステンレスなどの金属製の商品も多くあり、塩ビ製に比べるとコストは増えますが、銅製に至っては、職人の技で作った部材は、装飾性もあり、屋根や庇の軒先を綺麗に魅せることも可能です。耐久性も塩ビ製とは違い、永い間家を美しく魅せるだけではなく、しっかりと守ってくれると思います。

他にも鎖樋(くさりどい)などもあり、玄関先など雨樋を縦に落としたく無い箇所に使用し、雨降りの際など、鎖に沿って水滴る様は、美しいと感じます。

〈銑金物(かざりかなもの)〉

銑金物とは、建物の各部の補強や装飾を兼ねた金具。長押しなどに出ている釘の頭部を隠す為の装飾金物などの事で、長押し飾り



六葉金具

襖の引き手



もその一例になります。他にも襖の引き手、天井金物など色々な部位に使われています。

建物に銑金物で飾ることは、現存する世界最古の木造建築物でもある奈良の法隆寺以来、伝統的に行われていて、特に桃山時代から江戸時代初期にかけて、銑金物の使用は最盛期を迎え、装飾性が高く手のこんだものが多く生み出されました。それらは社寺仏閣だけでなく、將軍や大名などの居館となるような豪壮な構えの書院造をはじめ、住宅建築にも多用されるようになったそうです。



神輿

〈建築板金の未来〉

銑金物などは、洋風が生まれ、和室が減ってきている現代の家づくりにおいては使用されないことが多くなっています。現代の家づくりに携わる多くの設計士、工務店、職人達は、経済性、実用性、機能性だけを求める家づくりをしていると言わざるを得ない時代です。工業製品である「既製品」はその最たる物で、コスト、実用性、機能性を満たした規格の大量生産を行い、

早く、安く、誰でも扱える新建材もその例です。

反対に今回、紹介させて頂いた板金職人の技や美意識は、忘れ去られたかの如く、ただの鑑賞目的だけの芸術品と位置づけて良いのでしょうか？ 実用性、機能性やコストを気にするなどは言いませんが、古くからの日本の家づくりを知り考えた時、自然の助けを得ながら「機能性と芸術性」がうまく融合していることに気づかされます。

この先の未来も、われわれ日本人に脈々と流れる美意識のDNAで、家づくりが行われている、そんな日本であって欲しいですね。



解説/山本康彦◎1968年神奈川県鎌倉市生まれ。18歳から職人として30年近く湘南の地で家づくりに携わる。土を利用しての建材、版築製品の研究・開発、販売などに従事。一級建築士だけではなく、古民家鑑定士などの資格も30以上持っており、伝統的な構法や建材にも造詣が深い。近代の建材(新建材)や工法の矛盾や実害を肌で感じ、人が住まう家というものを原点から見つめ直す。エコブームに流されないパッシブで地域循環型の家づくりをめざし、未だにすべては解明されていない伝統的な工法や素材について研究や開発に余念がない。

取材協力

株式会社ワイズ

〒253-0021 神奈川県茅ヶ崎市浜竹3-4-64
TEL: 0467-88-3903 FAX: 0467-88-3907
URL: <http://www.ys-no1.co.jp>
mail: ys-no1@ys-no1.co.jp

